

『宇治拾遺物語』研究

—「住居」怪異譚に見る〈境界〉の諸相—

酒 井 美沙世

はじめに

私は京都、特に平安期の歴史や文化に惹かれ古典文学を学ぶようになった。現在でも京都市街には昔ながらの寺社が点在し、平安京創建当時の面影をあちこちに残している。そんな京都という街は千二百年以上の長い歴史の中で、土地と人との濃密な関係を築いてきた。中でも住居は生活の基盤であり、それだけに個人の

思い入れも格別であろう。そしてやがて家の主は世代交代を迎え、住居は一族に引き継がれていく。もしくは人手に渡ったり、荒廃してゆくこともあっただろう。この一連の作業を幾度となく繰り返してきた京都の土地には、先人達の歴史が刻み込まれている。私はその点に魅力を感じ、京都の「住居」と「土地」に焦点を当てて『宇治拾遺物語』を読み解いてゆくことにした。『宇治拾遺物語』収録説話の多くは平安京を舞台とし、京中の家屋敷が実名

で登場する。そして屋敷には生前の主の「霊」や「鬼」など、人外の存在が現れては怪異を引き起こす。これらの怪異譚を通じて説話集の成立過程にも通じる〈境界〉性を読み取り、『宇治拾遺物語』全体を〈境界〉の文学として考察してゆく。この論文を通じて平安京、そして京都の新たな一面を発見できれば幸いである。

一 『宇治拾遺物語』と〈境界〉

『宇治拾遺物語』と〈境界〉の関係について考える時、まず留意せねばならないのは「説話」とは何かという問題である。これについて山岡敬和氏は説話の特質は「伝承性」にあるとし、説話とは〈誰のものでもない物語〉であって、それを語り出したり創り出した者が問われることはないとする。^{注1}そして説話自体のもつ〈誰のものでもない物語〉という性質は、〈境界〉性という〈物語〉が本来的に有している位相に通じてゆくという。ではその〈境界〉

とはどのようなものだろうか。

網野善彦氏は、境界領域、あるいは境界的な「場」というのは地理的な境界領域だけでなく、自然と人間、人の力の及び難い「聖」なる世界と人間の世界、「聖界」と「俗界」との境界もあわせて考えるべきだとする。中世以前の社会において、山野河海の多くの部分は人の力のほとんど及ばぬ状況にあり、その意味で「無所有」であつたと言つてよい。それは神仏の世界に属するものと考えられ、そうした世界と人間の社会との接点が境界的な場であるという。そう考えると、説話自体のもつ「誰のものでもない物語」という性質はまさに「無所有」の自然のものであり、「聖」なる性質を帯びていると言えよう。

では、次に『宇治拾遺物語』序文から成立にまつわる「境界」性について考察する。しかし『宇治拾遺物語』の詳しい成立事情は明らかになつていない。通常、序文は作者自らが作品の成立事情を述べるものだが、『宇治拾遺物語』に関しては『宇治大納言物語』の成立事情と、その編纂者である源隆国の叙述が大半を占めている。序文は『宇治大納言物語』の成立過程について、平等院南泉房にこもつた大納言源隆国が

髻を結びわけて、をかしげなる姿にて、筵を板に敷きてすみ居侍りて、大きな打輪をもてあふがせなどして、往來の

者、上下をいはず呼び集め、昔物語をせさせて、我は内にそひ臥して、語るにしたがひて大きな双紙に書かれけり。^{注3}
と述べる。肝心の『宇治拾遺物語』に関しては『宇治大納言物語』の叙述の後に、

さるほどに、今の世にまた物語書き入れたる出で来たれり。

大納言の物語にもれたるを拾ひ集め、またその後の事など書き集めたるなるべし。名を宇治拾遺物語といふ。

とあるのみだ。このように『宇治拾遺物語』成立の背景には『宇治大納言物語』の影が見え隠れしており、両者の境界線は明確ではない。この件に関して山岡敬和氏は、隆国がさせた「昔物語」＝説話とは日常の裂け目に生じた「物語」であり「異界」との交通の物語であるとする。「物語る」ことの有する社会性と通時性のために、「物語」にはそれを創つた作者などどこにも存在しない。存在するのは記録者のみであり、その記録者を源隆国に仮託して成立したのが『宇治大納言物語』であつた。しかし隆国による編纂過程もまた事実ではなく宇治拾遺物語から紡ぎ出されてきた一つの「昔物語」に過ぎなかつたとする。^{注4}このように『宇治拾遺物語』序文は記録者としての源隆国の姿を覗かせ、「聖」なる「物語」が「俗」たる人間によつて記録されたという物語を作り出す。そしてその「物語」を語るにふさわしい場が、交通の要衝としての宇

治であり、聖俗混淆した平等院であり、放髻に打輪姿という異形の隆国その人の前であつた。^{注5}

宇治は都の周縁に位置し、陸路及び水路の帰節点として交通の要衝を占めていた。宇治川には宇治橋が架設され、古代大和政権にとつては宇治を通過する古北陸道が重要な幹線道路とされた。

境界は前近代人にあつてはムラ(村)や町はずれの一定地点、坂やチマタや橋など、多く交通路上の「点」(空間)として表された^{注6}ので、宇治も〈境界〉的な場と捉えることができる。そして隆国の居住した平等院は極楽往生を願う天台浄土系の単立寺院であり、いわば「極楽」と「俗世」の接する〈境界〉的な場であつた。その宇治の平等院という二重の〈境界〉に囲まれた場で、源隆国は「髻を結びわけて、をかしげなる姿にて」物語を語らせる。この異形とも言うべき姿にはどのような意味が込められているのか。

「髻を結びわけて」という髪型について、ここでは山岡敬和氏の「髪を結び曲げた状態」を指すという説を取り上げる。序文はこれに「をかしげなる姿にて」と続けるように、髻を人前に晒す行為は絶えず笑いと結び付いた。隆国がこの姿を採ることによつて、説話物語の特質である「おかしき事や利口なる事」の世界が開かれていくことを象徴しているのである。さらに、髻を放つ行

為は田楽の中にも見出すことができる。田楽の徒は「放髻」姿を採ることによつて日常の規範から逸脱した祝祭的空間を生み出すのであり、よつて隆国も「俗界から超俗界への移行あるいは飛躍」を〈笑い〉と共に果たしていると言えよう。しかも隆国の場合、浄土信仰の中心である平等院にいながら、この笑いを呼ぶ姿を採っている。まずそれは、俗的世界からも仏教的世界からも離脱した、両者の境界に隆国は位置を占めているということであり、換言すれば、ここに隆国が位置付けられていることによつて、世俗説話から仏教説話に至る「さまざま様々なる」内容の説話採録が実質的に可能になつていたのである。^{注7}

宇治の平等院という地理的、宗教的な〈境界〉の二重構造を舞台に、「放髻」姿によつて〈境界〉の位相に立つ源隆国。ここに『宇治大納言物語』の成立にまつわる宇治、平等院、隆国という〈境界〉の三重構造が成立する。『宇治大納言物語』は「聖」と「俗」の境、即ち〈境界〉の位相から紡ぎ出された作品だと言える。そして、さらにそこから長い年月を経て紡ぎ出されたのが『宇治拾遺物語』である。『宇治大納言物語』の影を背負つた『宇治拾遺物語』はまさに〈境界〉の文学である。

そして、説話はその内容もまた、人間／神仏・日常／非日常・現実／非現実・此界／異界といった、不可視と可視／既知と未知との〈境

界の位相の中にある。^{注8} その中でも一説話単位において、最も「境界」性が顕著に表れるのは怪異譚ではないか。『宇治拾遺物語』の時代において、人間の脅威となった自然。それよりもさらに人間の力の遠く及ばなかった「霊」や「鬼」などの超自然的存在。この超自然的存在と人間の接する場こそが「境界」的な場であると言えるだろう。そして『宇治拾遺物語』において、その多くが日常生活に密着した場である住居内に設定されている。第四十七話、八十四話、一五一話、一五八話、一五九話、一六〇話の六話は、いずれも住居や敷地内で起きた怪異現象の物語である。本来、屋敷・田畠といった垣根などによつて「仕切られ、限定された空間」は、「境界」的な場とは明確に区別された。^{注9} しかし、実際に住居内にも超自然的存在は出没する。そこは言わば日常と非日常の接点であり、その意味において十分に「境界」的な場であるのではないだろうか。

本論では、「住居」内における怪異譚（以後「住居」怪異譚と称す）を読み解くことにより、住居内に設定された「境界」について考察してゆく。そして改めて『宇治拾遺物語』を「境界」の文学として捉えた時、それを意味付ける序文の意義を考えてゆきたい。

二 「境界」の形成―第一五二話「河原院融公の霊住む事」―

では、初めに源融の屋敷・河原院の怪異譚から「境界」の形成

について考察する。

源融の死後、居所である河原院は宇多院に進上された。宇多院が住んでいた頃、夜半時分に西の対屋の塗籠ぬりこめから人の気配がするので院が御覧になると、ひの装束（束帯）を身に付けた人が太刀をはき笏を持って控えていた。院が誰何すると、左大臣源融であるという。融は院に河原院が死後も自分の家であると主張するが、それに対し宇多院は自分の居住の正当性を声高に主張する。すると融はかき消すように失せてしまった。

源融は死後「霊」となつて宇多院の前に現れる。「霊」とは、この世とは隔てられたあの世に属する死霊であり、霊が出没する河原院は「境界」的な場であると言える。このような「境界」はどのようにして作り出されるのだろうか。

源融（八二二〜八九五）は嵯峨天皇第八皇子として生れたが、元服と同時に臣籍降下し正四位下に叙された。彼はその後左大臣に至ったが、藤原良房・基経らの執政下で力を伸ばすことができず、河原院での厭世的な風流生活に身を委ねた。そして寛平七年八月二十五日、七十四歳で河原院にて薨去した。『大鏡』によると融は陽成天皇の譲位に際しては、皇位を継承するという野心を抱えていた。しかし融の上位にいた太政大臣藤原基経は融の皇位への道を閉ざす。そして光孝天皇が擁立されると基経は関白と同

様な地位に至り、融の政治家としての発言力は失われてしまった。政治の世界では左大臣という高位に昇り一度は皇位までも望んだ融が、その道を閉ざした藤原基経を恨みに思っても当然だろう。しかし基経は八九一年、融六十九歳の時に五十五歳で病死してしまふ。融の恨みは基経という対象を失い、昇華されないまま自邸・河原院への執着へと転化していったのだろうか。

その河原院は、北は六条坊門小路、南は七条坊門小路、西が万里小路、東が東京極大路に及ぶ鴨川西側の八町の地を占め、平安前期に栄えた邸宅であった。そして融の死後は息子の昇、更には宇多上皇に寄進され仙洞御所となった。しかし宇多院が没すると河原院は次第に荒廃し始め、やがては融の霊や魑魅魍魎が出没する〈境界〉的な場に成り果ててゆく。初めに河原院に怪異の生じた事例は『宇治拾遺物語』第一五一話で、『今昔物語集』巻第二十七かはらのあんのとほるのさだいじんのりやうをうたのあんならはしたまへることだに「川原院 融 左大臣霊 宇陀院見 給 語 第一」と『古本説話集』上の二十七（前半部）は同文的同話と見られる。そして類話としては『江談抄』第三の三十二話「融大臣の霊、寛平法皇の御腰を抱く事」があり、宇多院が京極御休所褒子と河原院に赴き房事に及ぶと、塗籠より融の霊が現れて御休所の下賜を請う。院が叱責すると融は院の腰を抱き御休所は失神するが、還御して浄蔵法師の加持により蘇生した。ここに挙げた四説話中に登場する

融は宇多院に対して怪異を引き起こす。それに対し宇多院は毅然とした態度を取り続けるが、融の宇多院への所業には何か因縁めいたものを感じさせられる。

源融と宇多院（八六七〜九三二）にはいくつかの共通点がある。その中の一つが、お互いに親王として生まれながらも臣籍降下させられたことである。宇多院は光孝天皇第七皇子、融は嵯峨天皇第八皇子と、その生まれのために皇位からは遠く臣下に下るのもやむを得なかったのだろう。しかし宇多院は親王に戻り皇位まで手に入れてしまふ。一方の融は基経に皇位への道を閉ざされ、政治家生命を断たれてしまった。結果的に宇多院は政治的勝者であり、源融は政治的敗者である。日陰に追いやられた融が、自分と同じような境遇にあった源みなものさだみ定省（宇多天皇）が皇位に着いたと知った時の驚愕はどれほどだったろうか。それまで抱いていた基経への恨みに加え宇多天皇への嫉妬が芽生え、二つの満たされない感情が自邸河原院への執着へと転化していったのではないだろうか。

そして融と宇多院は死者と生者という垣根を越えて河原院で対面する。田中徳定氏が、融にとって河原院は「心の世界を構築しうるユートピアであった」とする注10ように、河原院は政治の世界に居場所を失った融にとって心の均衡を図り自己実現できる唯一の場で

あつた。その河原院を、融の長年の執着の原因となつた宇多院は我が物顔に扱ふ。そんな宇多院の態度に我慢ができなくなつたのか、融はついに宇多院に意見するに及んでしまう。しかし宇多院はそんな融を理路整然と論破する。融は既に河原院の居住権を失つており、正当な居住者は宇多院である。そのことを改めて宇多院に指摘されることにより、融は自分の側に道理がないことに気付かされ、かき消すように失せたのさう。

そしてこの『宇治拾遺物語』第一五一話の類話である『本朝文粹』巻十四「宇多院の河原院左大臣の為に没後諷誦を修する文」では、延長四年（九二六）六月二十五日、河原院に融の亡霊が現れる。融は殺生の罪により地獄に墮ち、責め苦に耐えかねて宇多院に地獄からの救済を託奏した。この要求を受け、宇多院は七月四日に亡者追善供養のために七か寺に命じて諷誦を修した。『十訓抄』五の一にも延長八年とするが同内容が載る。この宇多院の諷誦によつて河原院の怪異は鎮まるかと思えたが、九三一年に宇多院が没すると河原院は荒廢し怪異現象も発生する。

『今昔物語集』巻第二十七「東人宿川原院被取妻語あつまのひとかはらのみんにやどりてめをとらるること第十七」では、東国より上京した男が無人の河原院に宿泊する。しかし夕暮れ時に室内の妻戸から手が伸びてきて、男の妻を戸の中に引き入れ吸い殺してしまふ。この説話に登場する「もの」は人の

前に姿を現さず名前も出てこないもので、話中では鬼のしわざとされる。一方『宇治拾遺物語』や『江談抄』の融の霊は生前の自我を保つており、実害もほとんどないと言つてよい。そう考えると九二六年の宇多院の諷誦を境にして、それ以前と以後の河原院の怪異では質が変わつてきていることが分かる。諷誦以前は「源融」という固有名詞をもつた「霊」が引き起こす怪異、諷誦以後は固有名詞を持たない「鬼」が引き起こす怪異なのである。

ではここで、『宇治拾遺物語』第一五一話で融が自らを称した「こ（河原院）の主に候ふ翁なり」という言葉から、融の「主」としての性格を考える。『宇治拾遺物語』一五一、『今昔物語集』巻二十七の二、『古本説話集』上の二十七、『江談抄』三の三二、これら今までに取り上げてきた説話中で、融の霊は共通して寝殿内塗籠から出現する。塗籠とは日本中世において家内部の密室・小倉庫をいう言葉で、平安文学は塗籠を家内部における女性の管轄領域として描き出すことが多い。また、しばしば寝室・閨房であり女性の倉庫・家財管理権はその寝室管理権と一体であつた。塗籠は中世後期になると「納戸」という言葉の位置が高くなり、家の盛衰に関わる「納戸神」の存在が信じられた。この神は家族の命運や稲の豊饒、富、幸運など家の盛衰にかかわる神となつており、納戸神の背景には家屋の内奥部にはその家とそこに住む家族

とを守護する靈威が潜んでいるという信仰があったと思われる。融の靈を納戸神と同一視するならば、融は死後も当然に河原院の倉庫家財管理権・寢室管理権を握っていることになる。また、融が河原院の盛衰をも左右することになる。宇多院によって融の主張は退けられてしまったが、融の納戸神としての性質を考えると、この主張にあながち道理がないとは言いつれない。しかし宇多院は諷誦を修することによって、屋敷の繁栄を司る納戸神としての融を追い出してしまった。そして宇多院が没して天皇家の威光が消え失せると、河原院は魑魅魍魎の住む〈境界〉的な場に成り果ててしまったのだろう。

しかし元を辿れば、河原院にまつわる全ての怪異の発端は融の靈であり、それによって河原院は〈境界〉性を帯びた場となった。そして、やがて怪異現象は連鎖反応を起すように広がり『今昔物語集』巻二十七の十七においては鬼の巢窟と成り果てる。もし融の靈が現れなければ、河原院は代々皇孫に受け継がれ、より繁栄していたかもしれない。こうして融の執着は、かつて「ユートピア」であった河原院を荒廃させるという矛盾した現象を引き起こす。それは「靈」という、この世とあの世の狭間にある〈境界〉的な存在が住みつくことにより、その〈境界〉性が屋敷にも伝播され〈境界〉領域が形成されたことによるのだろう。この『宇治

拾遺物語』第一五一話からは、人間が死することによって〈境界〉性を帯び、現世の土地屋敷にまで影響を与え〈境界〉領域を形成していく過程が読み取れるのである。

三 〈境界〉の崩壊 — 第一五八話「陽成院ばけ物の事」—

次に陽成上皇の御所・陽成院ようせいいんに現れた翁姿の「物」にまつわる怪異譚から、〈境界〉の崩壊について考察する。

陽成上皇、退位後の御所は物の住む所であった。大きな池に臨んだ釣殿に番の者が寝ていたところ、夜中にこの男の顔をなでる者がいた。男が太刀を抜いてつかんでみると、それは浅黄あさぎの上下かみしもを着た翁であった。その翁が「我はこれ、昔住みし主なり。浦嶋が子の弟なり。古いにしへよりこの所に住みて千二百余年になるなり。願はくは許し給へ。ここに社を作りて齋いはひ給へ。さらばいかにもまぼり奉らん」と言う。しかし男が自分の一存では決められないと言うと、翁は男を三度蹴り上げ、非常に大きくなって男が落ちてきたところを一口で食ってしまった。

翁が登場する以前、物語本文は陽成院を「物すむ所」であるとしている。「物」という言葉は物の怪の「もの」で妖怪であるが、平安時代においては実態の把握できぬ「もの」の現象を「ものけ」(物の氣、物の怪)として死靈とか生靈の祟ることを言った。注11翁は

自らを「浦嶋が子の弟」で、陽成院に千二百余年住む「主」であると言う。浦嶋子は上代以来の伝説的人物であるが、その弟という人物については未詳である。そこで、この翁の正体について、類話である『今昔物語集』巻第二十七「冷泉院水精成人形 被 捕 語（れいせいのおんのみづのたまののかたちとなりていんげんじ） 第五」を参考にする。

陽成上皇の没後、陽成院はその地所の真ん中を東西に走る冷泉小路を開いて北の町は人家になり、南の町には池などが少し残っていた。ある夏のころ、南町の西の対屋に身の丈二尺の翁が現れ、寝ている人の顔のあたりをなでた。その翁は池の汀（みぎわ）まで行ってかき消すように失せた。その後も夜な夜な出て来ては顔をなでるの
で、一人の男がその翁を捕えようと縄を持って縁側に伏して待った。夜半過ぎ、男が少しまどろんだところ顔に冷たいものが触り、目を覚ますや否や引つ捕え縛り上げた。人が集まり灯をともして見ると、身の丈二尺ほどの浅黄色の上下を着けた翁が今にも死に
そうな様子である。翁が盥（たらい）に水を入れて持ってきてくれと言うので翁の前に置くと、翁は「我レハ水ノ精（たま）」と言って水の中に落ち込み溶け入ってしまった。以後、翁が現れることはなかった。

この「水ノ精」と名乗る翁と『宇治拾遺物語』第一五八話の「物」との間には、いくつかの共通点がある。まず姿形は共に浅黄の上下を着た翁である。そして翁が現れる時間帯は夜中で、釣殿

や池という水の周りに現れては、寝ている人の顔をなでる。このように陽成院の「物」と「水ノ精」には姿形・現れる時と場所・行動と四つの共通点があり、両者は同一の存在だと考えられる。そして両者が水の周辺に現れる点を考えると、翁の正体は池に住む「水神」なのではないか。

「水神」は水にまつわる神の総称で、蛇という具象性をもって語られる例が多い。『宇治拾遺物語』第一五八話の翁は、体を非常に大きくして男を一口で食ってしまう。これは蛇が自分よりも大きな獲物を一飲みにするのと似ており、翁は水神として蛇の性質を留めていると言えよう。では、なぜ同じ陽成院の水神が『宇治拾遺物語』では男を食うという凶暴性を見せる一方、『今昔物語集』では人に捕えられてしまうのか。

この二つの物語の舞台となった陽成院は左京二条二坊十四町（大炊御門大路南、冷泉小路北、西洞院大路西、油小路東）の地にあり、元慶八年（八八四）二月四日、陽成天皇が譲位し御所と定めた後、二坊十三町（二条大路北、冷泉小路南）が寄せられ南北二町に及ぶ大第宅となった。こうして以前からあった十四町は陽成院の北町、後に加えられた十三町は南町と呼ばれた。しかし天曆三年（九四九）に上皇が没すると、陽成院の北町は民有地となり、南町のほうは荒屋敷となって池には浮草や菖蒲が生い茂る

有様であつた。

『宇治拾遺物語』第一五八話は陽成上皇が陽成院に住んでいた頃の物語であり、当時の陽成院は南北二町に及ぶ大邸宅であつた。

当然、水神である翁が住んでいた池も整備されていたことだろう。

しかし『今昔物語集』の翁は陽成上皇の没後、南町の「萍昌禰生うやみしやぶぢ繁しげりテいとむかし六むか借け氣げ」注12な池より出現する。そこには上皇の在世時、御所として栄えた陽成院の面影はない。翁の住処である池が衰退して

いくと共に、彼の水神としての力も衰えていったのではないだろうか。陽成院の池が御所として整備されていた頃、翁は水神として人間の脅威となる存在だったに違いない。そのため水神の要求に即座に応じなかつた男は、水神の怒りを買ひ一飲みにされてしまふ。しかし陽成上皇没後の陽成院は、南北に分断され池は荒れ果ててしまふ。この池の衰退と共に水神である翁も零落し、人間の脅威ではなくなつていった。だからこそ『今昔物語集』では人に捕えられてしまつたのである。

また翁は『宇治拾遺物語』第一五八話で、自分を祀れば「いかにもまぼり奉らん」と、あたかも自分が屋敷の住人にとって万能の神であるかのような言い方をする。この言動から、翁による土地の靈的支配は屋敷全体に及んでいたと思われる。しかし人間は翁の支配する土地に侵入し、陽成院の土地を一つに分断してしまふ。

陽成院は「物」の住む〈境界〉的な場として知られていたが、既に「物」は人間の脅威ではなかつた。だからこそ人間は、〈境界〉的な場であつた陽成院の敷地を切り崩すことができたのである。

『宇治拾遺物語』第一五八話だけを見るならば、人間対「物」の対決では、「物」の方が圧倒的な力をもつて人間を制する。陽成院は水神である翁によつて靈的に支配され、「物」の住む池という邸内における〈境界〉領域は健在である。これは〈境界〉が〈境界〉として、人間の脅威であつた時代と言えるだろう。しかし『今昔物語集』の陽成上皇没後という時を経た物語では、人間にとつて自然という〈境界〉は脅威ではなくなり、「水ノ精」は人間の力に敗れる。この一連の『宇治拾遺物語』と『今昔物語集』の陽成院にまつわる怪異譚は、本来人間にとつて〈境界〉的な存在だったものたちが〈境界〉性を失ひ、人間が従前の脅威を克服していく過程の物語なのである。

四 〈境界〉の越境—第一六〇話「一条棧敷屋、鬼の事」—

次に一条棧敷屋さじまやに生じた怪異譚から、〈境界〉の越境について考察する。

一条大路の棧敷屋に男が遊女と泊まつたが、夜中ごろ大路に「諸行無常」と詠じて通り過ぎる者がいる。男が藪戸しとみどを開けて見ると、

丈は軒と等しく馬の頭をした鬼だった。男は恐ろしさに奥の方へ引つ込んだところ、鬼が格子戸を押し開けて顔をさし込み「よく御覧じつるな、御覧じつるな」と言う。男は太刀を抜き構えたが、鬼は「よくよく御覧ぜよ」と言う^{と立ち去って行った}。「百鬼夜行」なのだろうか。

鬼が顔をさし入れたという一条棧敷屋は、一条大路に面した棧敷屋である。棧敷とは祭礼・芸能などの見物のために造作された観覧席で、一条大路の両側には多くの棧敷が設けられた。そして一条大路は平安京北辺の通りで、京の内と外の「境界」に位置する場であった。それだけに一条大路には怪異現象が多く伝えられる。『今昔物語集』巻第二十七「高陽川狐変女乗馬尻語第四十一」^{かうやがはのちねをなへてむあしりへのきこたししきふち}では、滝口の武士が一条大路で狐の化けた行列に騙され、気付かぬ間に鳥辺野へ迷い込んでしまう。そして一条大路と東堀川の交点にあった一条尻橋は、古代・中世を通じて京城の境とされ、橋占を行う場所として多くの伝承を生んだ。『撰集抄』には「善清行死去の知らせを受けた子の浄蔵が、尻橋上で父の葬列に会い嘆き悲しんだところ一時蘇生したとある。清行の蘇生は、尻橋が死者の蘇りの場所と考えられていたためと思われ、そこはまさにあの世とこの世の境であった。このように一条棧敷屋境界は異界と現世の「境界」であり、「鬼」が現れるにふさわしい場であった。

そしてこの一条棧敷屋で鬼と遭遇した男は最後に「百鬼夜行にあるやらん」と語る。百鬼夜行とは色々な妖怪が列をなして夜歩くことで、これに遭遇すると遠近の者がみな死ぬと大変忌み嫌った。『宇治拾遺物語』第十七話「修行者、百鬼夜行にあふ事」は次のような話を伝える。

ある修行者が摂津国の竜泉寺という無任の寺に泊まり、不動の呪を唱えていた。すると夜中時分、百人ほどが堂の中に入ってきた。それは目一つのもの、角が生えているものなど、様々である。その中の一人が修行者を片手で引っさげて堂の軒下に移した。夜が明けて修行者があたりを見回すと昨夜の寺はなく、そこは肥前国だという。

このように百鬼夜行の鬼は、強大な力を持った存在として恐れられた。この修行僧は不動の呪を唱えていたために命が助かったのだろう。しかし『宇治拾遺物語』第一六〇話の男は太刀を抜いて構えるだけで、鬼から身を守る特殊技能を身に付けてはいない。「百鬼夜行」に遭って、なぜこの男は無事だったのか。

男が遭遇した「馬の頭なる鬼」は、「諸行無常」と詠じながら一条大路を過ぎてゆく。最も特徴的なのは、その「馬の頭」だろう。この鬼は地獄に住むという「馬頭鬼」^{めづき}なのではないだろうか。「馬頭」^{めづ}は馬頭・人身の地獄の獄卒であり、閻魔王の眷属の一である。

亡者は地獄で閻魔大王によつて審判され、生前の罪惡の輕重によつて地獄の獄卒に刑罰を加えられる。この地獄の獄卒を俗に鬼といい、悪行を働いた者を閻魔大王の命で地獄から「火車」を引いて迎えに来るといふ^{注13}。そして、鬼が詠じていた「諸行無常」という言葉は、『涅槃經』に説く「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂」の「雪山偈」に由来する。その意は「諸々の作られたものは無常である。生じては滅び滅びては生じる性質のものであり、そのようなになっている。それらにとらわれない境地が、悟りの世界であり、眞の安樂の世界である」というものだ。このように一条棧敷屋に現れる鬼には、「馬頭」「雪山偈」という仏教的な要素が見られる。そして、いわゆる「百鬼夜行」が百以上の鬼が群をなして集まるのとは異なり、「馬の頭なる鬼」は単独で現れる。この一条棧敷屋に現れた鬼は、本当に百鬼夜行の鬼なのだろうか。おそらく「馬の頭なる鬼」は地獄の獄卒「馬頭鬼」であり、悪行を働いた者を地獄から迎えに来たところだったのだろう。そう考えれば、鬼の詠じる「諸行無常」という雪山偈の一節は、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上という六道を輪廻する人々の無常と、「悟り」によつて六道から解脱することができることを表しており、六道を往来する地獄からの使者が口ずさむにふさわしい一節かと思われる。そして、刀を構えた男に対して鬼が言った言葉

「よくよく御覽ぜよ」は、悪行を働けば自分のような獄卒が迎えに来るので氣を付けるようにと、男を戒めた言葉だったのだろう。それゆゑ、鬼は男に危害を加えることなく去つていったのだ。

また、馬頭鬼は閻魔大王の眷屬であり、閻魔大王は地藏菩薩の化身であるとも言う。地藏菩薩は釈迦の滅後、弥勒が世に出るまでの期間、人々を救つて悟りの境地に導く任をもち、六道を輪廻する人々を全て救うことを主眼とした。この地藏菩薩は『宇治拾遺物語』の中にも、第十六、四十四、四十五、七十、八十二、八十三話と、六話登場する。その中でも第四十四、八十三話は、地獄の審判を受ける亡者が閻魔大王に地藏菩薩のはからいで生き返るという物語である。また、第十六話では地藏は童の姿で人前に現れ、第八十二話では無間地獄に落ちた悪僧を助けるために地獄へ同伴する。このように『宇治拾遺物語』の地藏は、人の前に姿を現し行動する仏であり、その行動範囲も現世から地獄へと、まさに六道を往来する仏であった。この六道の往来者としての地藏のイメージが、眷屬である第一一〇話の獄卒馬頭鬼へと引き継がれているのだろう。だからこそ馬頭鬼は、地獄と人間世界という六道間の〈境界〉を飛び越えて、「諸行無常」を詠じながら〈境界〉的な場である一条大路を往来する。

この話は一条大路という〈境界〉的な場を舞台に、超自然的存

在である「鬼」と人間が遭遇するという〈境界〉性を帯びた物語である。しかし物語の背景には人間世界と地獄という六道間における〈境界〉が、一条大路よりも大きな〈境界〉的位相として存在しているのではないか。つまり、馬頭鬼に見る六道間の越境という大きな〈境界〉性を背景に、鬼と人、異界と此界は一条大路という〈境界〉領域で遭遇するのである。

まとめ

ここまで〈境界〉の形成から崩壊、越境と見てきたが、前述の『宇治拾遺物語』第一六〇話に見る「六道」という仏教的世界観は、序文に語られる『宇治大納言物語』の成立過程ともつながつてゆく。源隆国が『宇治大納言物語』を採録した宇治の平等院は地理的〈境界〉であり、また聖俗の〈境界〉でもあった。しかし平等院という仏教寺院に注目してみると、それは単なる聖俗の〈境界〉ではなく、六道における人間世界と他の五つの世界との接点―〈境界〉―なのではないか。そして源隆国は宇治の平等院という〈境界〉の二重構造の中で、「放髻」姿によって自ら〈境界〉の位相に立ち〈境界〉の三重構造を作り出した。なぜ、序文はこれほどまでに『宇治大納言物語』の成立過程に〈境界〉を作り出すのか。それは物語の記録者である隆国を六道の超越者とし、地獄・餓

鬼・畜生・修羅・人間・天上という六つの世界で起きた種々雑多な物語を記録させるのに相応しい人物に位置付けるためなのだろう。宇治、平等院、「放髻」姿という〈境界〉の三重構造の中心に在ることで、隆国は現実世界を超越し、〈異界〉との交通の〈物語〉である説話を記録することが可能になるのである。だからこそ序文は『宇治大納言物語』の内容を「天竺の事もあり、大唐の事もあり、日本の事もあり。それがうちに貴き事もあり、をかしき事もあり、恐ろしき事もあり、哀れなる事もあり、きたなき事もあり、少々は空物語もあり、利口なる事もあり、様々やうやうなり」と物語る。

このように『宇治大納言物語』には「空物語」など非現実的な物語も採録されており、その不可視の物語に如何にリアティーを与えるかが問題となった。そのため、隆国を六道の超越者として全ての世界を覗き見ることができ存在に位置付けることで、可視の現実世界だけでなく不可視の異界の出来事すらも採録した物語を成立させたのだろう。だからこそ『宇治大納言物語』から時を経て生じた『宇治拾遺物語』には「霊」、「水神」、「鬼」といった現世の位相を超越した超自然的存在が現れ、説話集の中を縦横無尽に動き回るのである。

以上、『宇治拾遺物語』の「住居」怪異譚は〈境界〉領域の形成

から崩壊、越境、そして説話集全体を包み込む「六道」という世界観まで〈境界〉の諸相を描き出す。『宇治拾遺物語』は作品単位で「無所有」の〈境界〉性を帯びており、六道世界を超越した位相に位置付けられた。まさに〈境界〉の文学であると言える。そして各説話単位で見た時、「住居」怪異譚には作品のもつ〈境界〉性が凝縮されている。「住居」怪異譚は単独の説話でありながら、説話集全体の〈境界〉性を描き出しているのである。

注

注1 山岡敬和「〈境界〉としての読書」——『宇治拾遺物語』を読むこととは——『説話論集』第七巻 清文堂 一九九七

注2 網野善彦「境界領域と国家」(『日本の社会史』第二巻 岩波書店 一九八七)

注3 『宇治拾遺物語』本文の引用は全て『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』(校注・訳 小林保治 増古和子 小学館 一九九六)に拠る。

注4 山岡敬和『宇治拾遺物語』——謎と魅力の説話集——(『国文学 解釈と鑑賞』至文堂 一九九三・十二)

注5 注4に同じ

注6 高橋昌明「境界の祭祀」——酒吞童子説話の成立——(『日本の社会史』

第二巻 岩波書店 一九八七)

注7 山岡敬和「『宇治拾遺物語』序文考」——宇治をめぐる夢想——(『國學院雑誌 一九八八・一〇』)

注8 注1に同じ

注9 注2に同じ

注10 田中徳定「河原院と源融の風流」——平安朝文人の意識をめぐって——(『駒澤国文』一九八六・三)

注11 笹間良彦「図説・日本未確認生物事典」(柏美術出版 一九九四)

注12 『日本古典文学全集 今昔物語集』(小学館)

注13 注11に同じ

(さかい みさよ 二〇〇一年日文卒)